

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

ただだけんいちろう

玉田顕一郎 (1929-1994) は、1951年に日本大学芸術学部映画学科を卒業してアルスへ入社し、広告部を経て『写真の教室』、『カメラクラブ』の編集に携わりました。1955年に退社し、同年5月から千代田光学精工（後のミノルタ）愛用者クラブの機関誌『ロッコール』の創刊編集長に就任しました。1959年には『写真サロン』（玄光社）の編集長となり、1960年7月には『コマースャル・フォト』（同）の創刊編集長に就任しました。



『ロッコール』創刊号



『コマースャル・フォト』
創刊号（合本より）

玉田がアルス在職時に知り合い、『ロッコール』から『コマースャル・フォト』までアート・ディレクターをつとめた堀内誠一は、自著『父の時代・私の時代』（日本エディタースクール出版部・1979年）で活気に満ちた当時の様子を回想しています。2007年の増補改訂版（マガジンハウス）には、同時期について触れたエッセイが追録されています。

『コマースャル・フォト』1962年2月号まで編集長の任にあたった玉田は、その後東急エージェンシーにて広告プロデュースに携わります。1970年には写真製作会社のジーチーサンに移り、展示企画などを行いました。

1973年には再び堀内とコンビを組んで『ロッコール』の復刊に携わりました。また1975年10月、東京・新宿に開館した「ミノルタフォトスペース」の展示を1994年まで458回にわたり企画しました。そのほか写真書をはじめとした書籍の企画編集、アートディレクション、写真展プロデュース、広告制作など多方面で活動しました。特に写真集については『にっぽん THE FACE OF JAPAN』（ミノルタファミリー・1968年）を皮切りに、94冊もの編集を手がけています。

1980年5月には季刊『メディアレビュー』（東京313センター）の創刊編集長に就任しました。このころから写真雑誌での連載が見られます。『日本カメラ』には、1980年1月号から1年間「射心望遠鏡」を、『日本フォトコンテスト』でも同期間に「写真面白ばなし」を寄せ、1981年1月号から1983年12月号まで写真愛好家へのインタビューを基にした「写真聞き書き帖 私の生きざま写しざま」を担当しました。『アサヒカメラ』では、1983年11月号から翌年12月号および1986年1月号から1992年12月号まで座談・対談形式による写真批評、1993年1月号から1年間、広告写真についての対談批評を担当しました。

没後の1995年には『玉田顕一郎の仕事』（東京フォト企画）が刊行されました。玉田の主な仕事紹介に加え、生前親交の深かった篠山紀信、中村正也などの写真家や、岡井耀毅などのフォトジャーナリストたちが思い出を寄せています。